

依田千百子著

『朝鮮の王権と神話伝承』

山下 欣一

文化の足跡とその歴史的意義

〔環日本海流と神話伝承〕

第四章 朝鮮からみた日本海域の神話  
伝承

第二章 朝鮮王権の構造と祭り

〔朝鮮王権の深層〕

第五章 朝鮮古代王権の構造―神聖王  
権・聖俗二分構造・女性の靈的  
優位性

第六章 朝鮮の祭りと王権

第三部 朝鮮の王権と神話伝承

〔王権の物語〕

第七章 朝鮮の王権と古代文学  
〔王権をめぐる神話伝承〕

第八章 朝鮮の王権と鍛冶伝承―王権  
と鉄

第九章 朝鮮の王権起源伝説と動物―  
王権と動物

〔王権と英雄〕

第一〇章 建国の英雄と救国の英雄―  
朱蒙、金庾信、李舜臣  
第十一章 王権を支えた賢者―三国統  
一の英傑・金庾信

依田千百子氏には、すでに、『朝鮮民俗文  
化の研究』（瑠璃書房 一九八五）、『朝鮮神  
話伝承の研究』（瑠璃書房 一九九一）など  
の著書があり、いずれも三百頁〜四百頁を越  
える大冊である。

本書の構成は、四部・一七章・附章一から  
成っている。これらの主要部分をあげてみよ  
う。

序にかえて

第一部 越境する神話伝承

〔朝鮮神話と記紀神話〕

第一章 朝鮮の巫歌型創成神話の構造  
と記紀神話

第二章 高句麗の建国神話と日本神話  
―随伴神をめぐる諸問題

〔朝鮮の神話伝承の多元的流入〕

第三章 渡来人の神話伝承―朝鮮渡来

わが国における朝鮮の神話伝承の研究は、  
喜田貞吉、三品彰英、岡正雄、松前健氏など  
の多くの研究者によって関心が払われてき  
たこともあり、研究史には多彩な堆積があ  
る。それらは、主として記紀神話との比較研  
究に主眼があった。古代において、朝鮮半島  
から渡来した人々や文物などによって、わが  
国のあらゆる分野に大きな影響が与えられ  
たのであり、記紀神話とその周辺への関連を  
含めての比較研究は注目の的でありつづけ  
ているのである。

近時、特に、この方面に関しての研究を構  
造的視座から推進してきたのが大林太良  
氏、吉田敦彦氏などであった。長年にわたっ  
て、大林太良氏の講筵に列し、朝鮮神話研究  
を展開してきたのが、依田千百子氏（摂南大  
学）である。今回、ここに『朝鮮の王権と神  
話伝承』（勉誠出版 二〇〇七）の大冊を刊  
行された。

#### 第四部 天と地、海と山―神話伝承からみ

##### た朝鮮民族の世界観

###### 〔創世神話から〕

###### 第二章 朝鮮の日月神話―神話、巫

歌、民間説話から

###### 第三章 朝鮮の洪水神話

###### 〔海と山の神話伝承〕

###### 第四章 朝鮮の海洋他界観―死者の

島・死者の国

###### 第五章 朝鮮の龍蛇信仰―王権と水

神・富と怨霊のシンボル

###### 第十六章 朝鮮の竜王―竜王からの贈

り物説話を中心に

###### 第十七章 異界としての山―朝鮮の神

話伝承から

#### 附章 金徳順の中国朝鮮族民間故

事と韓国昔話―口承文芸の

越境と再創造

以上のような本書の構成からみても依田千百子氏の視点は、まずは巨視的に問題点を設定し、論考を展開するのに資料群を精査しつつ細部を検証していき結論に至るとい

う方法をとっているという点が指摘できる。

その例示として、本書の巻頭におかれた〔朝鮮神話と記紀神話〕の「第一章 朝鮮の巫歌型創世神話の構造と記紀神話」をとり上げてみることにしよう。

著者は、まず、ここでは、朝鮮の神話の神話伝承の日本への影響を論究しているが、朝鮮は地理的に日本と一衣帯水の間にあり、文化的にも多くの影響を受けてきたとする。文字をはじめとして、大陸の先進文化は朝鮮からの渡来人によつて日本へ伝えられた。このような歴史的・文化的親近性は、当然神話にも反映して多くの類似性が認められるとする。基本的視点を構築する。

従つて、このような基本的視点から、次のような比較研究があげられるとする。

Ⅱ朝鮮渡来人の神話伝承の検討

(一) 神功皇后の新羅征討説話や天日矛渡来説話など、記紀の朝鮮関係伝承の検討

(二) 三輪山説話と百済系須恵器生産者集団の関係・上記以外の渡来人の神話伝承の検討

Ⅲ日朝語の比較研究の筆録者の問題など

しかしながら、このような日朝神話を比較しようとする場合、資料上の制約があるとする。

I日朝両国の神話伝承の共通要素の比較

(一) 記紀神話と『三国史記』『三国遺事』に記載されている朝鮮の古典伝承との比較

(二) 『三国史記』『三国遺事』あるいは中国の文献に出てくる史料以外の、朝鮮の民間神話(巫歌、民間説話)との比較

それは、日本の『古事記』、『日本書紀』は体系的にまとめられていて、その中に創世神話と建国王権神話の両者が記載されている。しかし、朝鮮では、『三国史記』(一二世紀)『三国遺事』(一三世紀)とそれに先行する『旧三国史』逸文などが、主となる資料であるが、それらはみな建国王権神話のみで、創世神話は記されていない。ただ、朝鮮の創世神話は民間に伝承されている巫歌や民間説話などに変形した形で残っているにすぎないとする。従来、日朝神話の類似がそれほど多く指摘されなかったのは、文献神話の場合には歴史化がはげしく、また巫歌の場合

には仏教や道教の影響が強く変形が著しいためであった。しかし、物語の根本にある構造をとり出して構造的比較研究を行なうことによって、日朝神話の間にはこれまで気づかなかった多くの類似が明確になつてきていると指摘する。

次に、朝鮮の巫歌型創世神話と記紀神話の構造的比較を試みている。周知のように、日本の『古事記』や『日本書紀』には、この世の始まりから順序よく体系的に記載されている。朝鮮の場合には、『三国史記』（一二世紀）、『三国遺事』（一二世紀）とこれに先行する『旧三国史』逸文などが、日本の神話関係との比較資料であるが、これらは王朝起源神話のみで、世界の起源についての創世神話は記載されていないのである。従つて、日本神話と朝鮮神話の類似がそれほど多く指摘されなかつた事情には、文献神話の場合には歴史化がはげしく、他方巫歌の場合には仏教や道教の影響が強く変形が著しいためであった。このために比較研究は、かなり困難であつた事情があつたと指摘する。

このような立脚点から、物語の根本にある構造をとり出して、構造的比較的研究を試みるのだとしている。そのために、比較の資料

として、一九二三年に孫晋泰によって咸鏡南道の巫歌に「天地創造神話」が挿入されていることが発見されて以来、第二次大戦後、本格的に創世巫歌が採集されている現状である。ここでは、「創世歌」として咸鏡南道での孫晋泰による採話資料と玄容駿による済州島の「天地開闢」の巫歌の二事例の概要を提示している。

朝鮮半島北部の咸鏡南道の資料と南部の済州島の資料では、共通した部分と異なつた部分があるとす。共通しているのは「天地開闢」「日月の整備」、「人類の起源」「この世の統治権争奪競争」の四つのモチーフである。しかし、北部の咸鏡南道と南部の済州島では、叙述が相違する部分もある。北部の弥勒には創造神としての性格があり、南部の大星王には稀薄である。この世の統治を競う二神の関係は、済州島では指令者である父の天地（主）王が存在し、大小星王は兄弟関係にあるが、咸鏡南道の弥勒と釈迦には父子・兄弟関係はない。前者は三分的で、後者は二分的である。また「人類の起源」は、北部では天から金銀の盤の上に落ちてきた虫から男女が生まれてきたと説いているのに対し、南部では地中から涌出している。食物の起源

についても北部では「神が食物を吐き出すモチーフ」が、南部では「死体化生モチーフ」がみられる。その他「原初混沌の観念」、「天父地母の観念」「宇宙二大領域の神が賭け事競争で統治領域を争うモチーフ」、このなかでも最後に花咲かせ競争をして、相手が眠っている間に侵入者が相手の花を取り替えて（盗む）競争に勝ち、この世の統治者になつたが、分治の仕方が詭計によつていたために、この世は混乱し社会悪が絶えないという部分で共通しているという指摘をしている。

この宇宙分治の話は、日本の宇氣比神話に対応する。このように共通要素とともに、本質的な異質要素を含む朝鮮の創世巫歌は、南北二類型に分類できるとし、これらの形成には、各々異なつた基層文化が関与したものであろうと考えられるとしている。また全篇に共通する「花咲かせ競争モチーフ」は、朝鮮固有の創世神話の上に被覆し、現在伝わるような創世巫歌に整備・再編成されるのは新しい仏教的要素であろうとしている。次に著者は、日本と対比して、創世神話が古典に記載されていない朝鮮の実状から、それに代る巫歌型創世神話について咸鏡南道と済州島からの事例をあげ、これらを北部型、南部型と

し、これらの事例の構成要素を対比的に抽出し、主要モチーフとしてまとめて表示することを試みている。これらの創世巫歌の物語の構成要素を抽出すると「天地混合」「天地分離」（世界巨人・自然的分離）「複数の日月の出現とその整備」「人類の起源（天井から降した虫から、大地からの涌出）」「天父地母の結婚」「宇宙分治者（大・小星王）の誕生」「天の宇宙分治の命令」「この世の統治権争奪競争（花盗み）」「天体と地上の混乱とその整備」「食物の起源（神の嘔吐、死体化生）の各モチーフによって構成されていることがわかるとする、そしてこれらの創成巫歌の物語構造は極めて類似しているとしている。これらを表示するが、さらに『古事記』と『日本書紀』の構造と対比する、そして、日本神話のイザナギ、イザナミ二神の国生み、神生み、火神誕生、黄泉国訪問は朝鮮の巫歌に見当たらないとする。その他のモチーフについては各々対応関係が認められるとする。そして、日本神話のイザナミの結婚から日月の誕生、宇宙分治、誓約、天の岩戸、食物神殺し、八俣大蛇退治までの伝承構造は明らかに朝鮮系であることが分るとしている。朝鮮の創世巫歌は仏教・道教の影響を受けて、かな

り変形しているため、外見は、日本の創世神話とは、大きな隔りがあるようにみえるが、物語を抽象化してその根底にある構造をとり出してみると、驚くほどの一致がみられるとしている。次に、朝鮮の創世神話の構造の特徴をみると、混沌から秩序への移行が二回繰り返し行なわれていることであるとされる。それは「原初の混沌」が原初の混沌であるとすると、二度目の混沌は「釈迦、小星王」がこの世を篡奪した後に出現した「混沌状態」である。弥勒と釈迦あるいは大小星王の宇宙二大領域の代表者の争いから、複数の日月が出現し、その整備を契機として、この世の新しい秩序が設定されたという。この構造は天照大神と須左之男の争いの結果、天照大御神の天岩戸隠れ（日食）という天変が生じ、天照大御神が再び復活して高天原（天上）の秩序が整備されたという日本神話と対応するとしている。宇宙二大領域の代表者の争いの結果おこった天変地異とは、朝鮮の場合複数の日月の出現であり、日本の場合日食である。太陽の異変では一致している。さらに、朝鮮の各界分治後の複数の日月の出現とその整備の話は、日本神話の天岩戸神話に対応するエピソードということになる。つづいて、

地上の混沌状態については重さで人間と鬼神を分け、松の粉で動植物を黙らせて人間と鬼神、動植物を区別したと地上の秩序の設定を述べている。構造的には日本神話の天岩戸神話に対応するエピソードということになるとする。この話は、構造的にみて、日本神話の八俣大蛇退治に対応するとし、混沌の象徴である多頭の蛇を退治することは、混沌状態を整備して、地上に秩序を設定することであり、朝鮮神話と見事に対応しているとしている。このように日本の記紀神話と朝鮮の巫歌型創世神話は、種々の伝承形態、時代的隔たりを越えて、神話モチーフの類似にとどまらず、神話の構造そのものについても、本質的な対応関係が認められるとしている。さらに、朝鮮には、巨人の排泄物、嘔吐などによって山川が作られたという世界巨人型の変形があり、笑話化している資料、流れ島伝説、洪水型兄妹人祖説話が存在し、伝説化している。このことは、南方系の創世神話が存在した可能性が考えられるが、今後の研究課題であるとしている。

本章は、構造的に日本神話と朝鮮神話の比較検討を試みるその序論的的位置づけを持ち、著者の問題折出の方法を示していると考え

られるので、その詳細について提示してみたいのである。この後に、著者の意図する「文化史的な研究方法」での論考が展開されているのであり、そこに多面的に神話を把握しようとする著者の意図と方法が提示されていると考えることができる。このような意味でもって、日本神話と朝鮮神話の研究に、新しく、その一步を印することのできる書であるといえよう。

たとえば、著者が朝鮮の巫歌型創世神話に「北部型」と「南部型」として表示している「花咲かせ競争」は、日本では「ミルクとサーカ」として、主としてわが国の南の島々に分布している話群である。これらの話群に着目した故和井田学氏（カナダ・アルバータ大学）は、一九九一年に「対立する二神の花競べ―中央・東アジアの神話学的研究」（『アンソロポス』八六・英文）を発表している。本論文は、琉球列島から「ミルクとサーカ」話群をとりあげ、その中央アジア起源、そして、その南東方面への伝播が朝鮮半島に及ぶ点を詳細に検討している。結論的に、本話群の起源を琉球列島に求めることができない以上、朝鮮半島、モンゴル、ブリヤート、ソヨバйкаル周辺のツングース、アルタイ・タタルなど

に注目すべきであるとして検討を進める。そして、「花競べ神話」の起源は、中央アジア、特にイラン伝承の影響下にあったブリヤートに求めることができるとしている。本神話は創造されると間もなく仏教的変容を受けている。それはバラガンスク地方のモンゴルとブリヤートというラマ教の影響を受けたところで変容したと推考できるとしている。

本論文は、琉球列島から「ミルクとサーカ」をとりあげ、その中央アジア起源、その南東方面への伝播が朝鮮半島に及ぶ点を検証し、この視点から琉球列島の本話群を整理・検討して提示している。そして、本話群の琉球列島への伝播は二十世紀初頭と比定できようとしている。

ここでは、依田千百子氏の新著『朝鮮の王権と神話伝承』の第一部「越境する神話伝承」の第一章「朝鮮の巫歌型創世神話の構造と記紀神話」をとり上げ、著者の問題点の把握と方法について検討し、さらに、ここで、著者が問題点として整理し、表示している「花競べ」モチーフについて、故和井田学氏の先駆的論考を例示したが、このことは、著者の指摘する問題点が今後の研究についての出発

点になる点を強調できると考え、その一端を紹介してみたのである。

著者の巨視的な視点に立脚し、論考を精細に展開しつつ細部に至るという方法を取り、結論に至る点が看取できるのである点を強調しておきたい。

（二〇〇七年、本体一二六〇〇円、勉誠出版）

（やました・きんいち）

鹿児島国際大学名誉教授